

以上、十乗観法を読んでとくに注目したいのは『起慈悲心』および『破法遍』に説かれている観察の思想が現代の医療に極めて有益であるということである。

(平成十五年五月例会)

***** 介 *****

榊原 悠紀田郎 著

『歯科保健医療小史』

「こんなにわかりやすい歯科の歴史書は初めてだ」

本書を一読した時の感想であった。

わが国の歯科の歴史研究は、昭和十一年十一月に、明治十九年の歯科医師法公布三十年記念事業としての「歯科医事衛生史」の編纂からはじまった。その後も歯科資料の収集、出版が進められていたが、第二次大戦の激化と敗戦による混乱のために中断していた。

再開は、昭和四十一年十一月の「歯学史集談会」の発足からはじまった。そして現在の「日本歯科医史学会」に成長した。

筆者は「集談会」の発足時からの委員で、以後、数々の研究成果を発表され、現在は、学会運営の最長老として後進の指導にあたられている。

本書は、筆者が歯科界に入ってから収集された膨大な資料

をもとに大学での授業に使われた講義録の集大成である。しかも、これは三十数年間、毎年新しく作成されたものである。したがって、内容の豊富さはもとより、随所に新しい試みが見られる。

本書は、七章よりなる。古代、中世、近世の章の後半には、西洋、日本、東洋の医事の比較年表が付けられ、四章の明治以降の章には、日本と諸外国の比較年表がついている。そのため、日本の医療の歩みと、諸外国のそれとの相互関係が、混乱なく理解できるように構成されている。

第一章の古代の項には、紀元前二千年ころペルーの開頭術や古代フェニキアのブリッジなど興味ある写真が載っている。

第二章の中世では、五世紀に伝来した中国医学が充実した九世紀ころの『医心方』などに見られる口歯病の記述がある。この宮廷社会中心の社会はやがて武家、庶民の時代となる十世紀ころには「絵巻」が独自の発展をする。『病の草子』に描かれている歯疾患に悩む人々の姿などが載っている。

第三章の近世では、ヨーロッパでの近代歯科の誕生と、江戸時代の日本の歯科療法事情を詳述している。特にわが国固有の木床義歯と米国の初代大統領ジョージ・ワシントンの義歯や東西の抜歯風景を図で比較しているのも興味深い。

第四章の近代では、幕末のオランダ医学の浸透から、変化していくわが国の医療の推移に触れ、一方、歯科領域では、発展する米国の歯科事情と、これがわが国の歯科医療の近代

化にはたした過程について記述している。

第五章明治時代では、日本人の目を引いた、治療椅子での施術、手用切削具や足踏エンンによる歯の切削、齶歯の充填法、蒸和ゴム製の義歯、笑気ガスによる無痛抜歯など、西欧歯科技術が日本に導入される歴史の記述がある。

わが国では医師の養成は国策として進められたのに対し、歯科では公的の養成機関すらなかつた。そのため、歯科医になるためには歯科医の所で書生をしたり、私塾で学んだりしていた。正規の歯科医の養成機関は、明治二二年に設立の高山歯科医学院が同四十年東京歯科医学専門学校に、同年設立の共立歯科医学院は、同四二年、日本歯科医学専門学校になり、この二校によつてははじめられた。

当時の両校の治療風景が、米国の学校の写真とともに載っている。

第六章の項は、大正元年の専門学校指定第一回生の卒業から始まり、翌年から女子の歯科医学校やその他数々の歯科医学専門学校が設立された。

昭和になって、同三年の官制の歯科医学校である高等歯科医学校設立をめぐる経過と校名の由来の話は興味深い。

「歯科医療行為は、内科系などの医療とは異なり、知識はもちろんであるが技術の占める割合が大きいため、そこで用いられる手段や歯科材料の変化によって大きな影響を受ける」と歯科医療行為の特殊性をとりあげ、歯科用器材、器具の变迁とそれにもなう歯科の技術の關係が記されている。

また、ムシ歯予防デーに始まる口腔衛生の普及運動や学校歯科についても記述されている。

第七章の昭和後期では、医療制度の変遷、社会問題となった差額徴収、老人医療問題など、最近の話題もとりあげている。

フツ素物導入をめぐる記述は、筆者の独壇場であり貴重で、読みごたえがある。

本書は、単なる歯科の医療史としてばかりでなく、歯科医療の将来を示唆するものであると思われる。

(新藤 恵久)

〔医歯薬出版、東京都文京区本駒込一―七―十、電話〇三一五
三九五―七六〇〇、平成十四年一月、B五判、二〇〇頁、六
〇〇〇円〕

八木剛平・田辺 英 著

『日本精神病治療史』

医学史研究のなかでも精神医学史、とりわけ日本の精神医学史研究については研究者の層も薄く、まだまだ未開拓の分野が少なくない。しかし、一九九七年に「日本精神医学史学会」が発足したことも一つの契機となり、日本の精神医学史についても意欲的な研究が次々と発表されるようになった。

二〇〇二年は豊作の年で、四月に八木・田辺氏による『日本